

パスカルの《アポロジ》の プラン復元に関して (IX)

竹 下 春 日

Sur le plan de l'《Apologie》 de Pascal (IX)

(五) ——前回において示されたわれわれの関係図は、10°→16°を除いて、各章の前後関係を明示していない。これにかんしては、未だ不明である。われわれは次に、これらの順序を決定しなければならない。この手掛りとなるものは、11°《A.P.R.》(La. 309-Br. 430)である。タイトルの A.P.R. は普通 A Port-Royal の意に解せられ、11°はパスカルがポール・ロワイヤルで講話を行った際原稿と見做され、したがって諸家はこの点に注目して、《アポロジ》のプランの論証にかんして、しばしばこの章(11°)を利用している。しかし Ernst は A.P.R. を《Apologie Pour (la) Religion》と解している⁽⁵⁾。いずれにせよ、11°《A.P.R.》が《アポロジ》の《第二部》の大まかな概観——Pol Ernst も肯定している《vue panoramique》⁽⁶⁾を、われわれに与えていることは、その内容そのものが如実に示しているところである。

この断章 La. 309 (11°はこの fr. のみで尽きている)は、長文であるので、われわれは要点を分割しつつ、原文の順序にしたがって、これと各《章》chapitre の対応関係を検討してゆき度い。

(イ) ——最初に出て来るのは、真の宗教なるものは、人間の偉大さと惨めさを示し、かつこれらの対立、矛盾を説明しうるものでなければならない、という主旨の叙述である。これは《章》との関連で言えば、《第一部》の諸章とのつながりを持つものであるが、同諸章の順序決定の際に、これらと 11°(La. 309)との関連を取り扱う予定であるので、以上の指摘にとどめて置く。

(ロ) ——次に現われる叙述は、以下のごとくである。《人間を幸福にする

ためには、真の宗教は彼に、神が存在すること、人は神を愛さなければならないこと、われわれの真の至福は神のなかに在ることであり、われわれの唯一の不幸は神より離れていることであるということを示さなければならない。そしてその宗教は、われわれが暗黒に満ち、そのために神を知り神を愛することを義務づけるにもかかわらず、われわれの邪欲は、神を愛することからわれわれをそむかせているのであるから、われわれは不義に満ちているということを認めなければならない。その宗教は、神に対し、またわれわれ自身の善に対してわれわれが持っているこれらの反対を説明してくれなければならない。その宗教は、われわれに、このような無能に対する救済と、その救済を得る手段とを教えてくれなければならないのである。ここで、世界じゅうのあらゆる宗教を吟味して、キリスト教以外に果してこれらの点を満足させるものがあるかどうかを考えてみてほしい。》この引用文の最初から、〈われわれの唯一の不幸は神より離れていることであるということを示さなければならない。〉までは、10° 〈至福〉中の La. 300-Br. 425 の〈第二部。信仰のない人間は、真の善をも正義をも知ることができないということ。〉という見出しの主旨によって、その意味するところが尽されている。次に、La. 309 中の前に続く部分——〈その宗教は、神に対し、またわれわれ自身の善に対してわれわれが持っているこれらの反対を説明してくれなければならない。〉までは、同じ La. 300 の〈神だけが、人間の真の善である。そして人間が神から離れて以来、自然のなかで、人間にとって神の代わりになれなかったものは何もなかったというのは、奇妙なことである。天体、天、地…悪徳、姦淫、不倫などそれである。そして、真の善を失って以来、人間にとって、あらゆるものが、何でも真の善として見なされうるようになり、神と理性と自然とのすべてにあんなにも反する自分自身の破壊に至るまでそうなったのである。〉と、その本旨において一致している。さて La. 309 中の上に続く〈その宗教は、われわれに、このような無能に対する救済と、その救済を得る手段とを教えてくれなければならないのである。〉もまた、La. 300 の〈人間は、彼を取巻くすべてのものによってそこを満たそうと試み、現在あるものから得られない助けを、現在ないものにさがし求めているのであるが、それらのものにはどれにもみな助ける力などはな

い。なぜなら、この無限の深淵は、無限で不変な存在、すなわち神自身によってしか満されえないからである。》と、表現を異にするのみで本質的に異なるものではない。それゆえわれわれは、(ロ)における叙述 (La. 309) の部分は、La. 300 (10°) と、したがってまた 10° 《至福》と緊密な対応関係にあることを理解しうるのである。すなわち、(ロ)の部分=10°。

(ハ) ——上掲引用文の最後の部分——《ここで、世界じゅうのあらゆる宗教を吟味して、キリスト教以外に果してこれらの点を満足させるものがあるかどうかを考えてみてほしい。》は、明らかに (Classé の 16° 《他宗教の虚偽》と照応一致を示している。ゆえに (ハ) の部分=16°。

(ニ) ——さて La. 309 の (ハ) に続く叙述は、次のようである——《われわれのうちにある善を、いっさいの善であるといつてわれわれに提示する哲学者たちが、果たしてそれだろうか。真の善とは、そんなものだろうか。彼らは果たしてわれわれの悪に対する救済を見いだしたのだろうか。人間を神と等しい地位に置いたことによって、人間の思い上がりを癒したというのであろうか。》以上が、9° 《哲学者たち》の章に該当することは、あまりにも明らかである。したがって (ニ) の部分=9° が成り立つ。

(ホ) ——次に (ニ) の《哲学者たち》にかんする叙述につづいては、再び他宗教に対する懐疑と批判が行われている。したがって (ハ) および (ニ) を総合すると、《哲学者たち》にかんする叙述は、キリスト教以外の宗教にかんする叙述に挟まれていることになるが、《哲学者たち》にかんする文章は、Éditions du Seuil において4行であるのに対し、他宗教にかんするものは約12行に達する。これによって、パスカルの脳裏にあっては、キリスト教のアンチテーゼとしては、他の宗教就中マホメット教 (ホに相当する原文中にある) が主位を占め、《哲学者たち》の所説は第二義的にすぎなかったことが、分る。したがってパスカルの《gradation》(VII 回参照)により、(ニ)→(ハ) すなわち 9°→16° が推定されるのである。

(ヘ) ——(ホ) に続く叙述は、『パンセ』において特異な形式——《擬人法》Prosopopée によって示される《神の知恵》la Sagesse de Dieu の言葉である。この神の言葉は、二つに分れる。前半は、神による人間の創造と原罪、

および人間存在に内在する矛盾と、これらの矛盾の〈原因〉la cause としての二つの人間本性（〈最初の本性〉 leur première nature と〈第二の本性〉 leur seconde nature）にかんするものである。人間存在の矛盾した状態とは、原罪にもとづく〈惨めさ〉 les misères と〈偉大さと栄光とのすべての動き〉 tous les mouvements de grandeur et de gloire との対立を意味している。ところで、この原因たる二個の本性にかんする叙述を、われわれは 18° 〈宗教の基礎と反論への回答〉中の La. 448-Br. 765 に見出す——〈相反のみなもと。Source des contrariétés. 十字架で死ぬまでへりくだった神。自分の死によって、死にうち勝ったメシア。イエス・キリストにおける二つの本性、二つの来臨、人間の本性の二つの状態。deux états de la nature de l'homme.〉したがって〈神の知恵〉の前半は、18° の章特にその前半たる〈宗教の基礎〉に相当することが、分る。振り返って見るとき、神による人間創造も原罪およびその結果たる本性の二状態も、すべてこれ〈宗教の基礎〉にかんするもののみであることは、キリスト教の常識から言って当然であったと、言いうるであろう。

〈神の知恵〉の言葉の後半は、人間救済の真の道が〈哲学者たち〉の所説にはない旨を、可成詳細に叙している。われわれはこれによって、(ホ)における〈哲学者たち〉にかんする叙述の簡略さを茲で補おうとするパスカルの意図を、十分理解しうるのであるが、しかしパスカルの真意はこの神の言葉の末尾にあることは、明らかである——〈こうしたものは、あなたがたの不義——これらの賢者たち〔哲学者たち〕の知らなかったあなたがたの不義を癒す道ではない。あなたがたが何であるかを、あなたがたに悟らせることができるのは、私一人である。……〉

(ト) —— (ヘ) の末尾の引用文はもちろん、キリスト教こそ救済可能の唯一の宗教たること、すなわち〈悔悛〉 pénitence によって、われわれは神の〈恩恵〉 grâce の徴したる〈イエス・キリスト〉 Jésus-Christ によって救われうること、こうしたことを意味するものである。したがって神の言葉が終わった後に、次の叙述が続くのは極めて当然である。〈アダム、イエス・キリスト。/もしあなたがたが神に結ばれるとしたら、これは恩恵によるのであって、本

性によるのではない。/もしあなたがたがへりくだらせられるとしたら、それは悔悛によるのであって、本性によるのではない。/このようにして、二重の能力は……/》以上を顧るとき、(へ)の末尾から、果然《イエス・キリスト》が中心的役割を帯びて登場して来るのを、われわれは明瞭に看取するのである。しかしこの(ト)の叙述も、18°《宗教の基礎と反論への回答》に対応的関連をもつことは、疑いえない。なぜなら、われわれは同章(18°)に La. 433-Br. 523 を見出すからである——《すべての信仰は、イエス・キリストとアダムとにおいて成り立ち、すべての道徳は邪欲と恩恵とにおいて成り立つ。》(ト)の引用文(La. 309)と比較する場合、《イエス・キリスト》、《アダム》、《恩恵》の三点は用語的にも一致しており、《悔悛》は《邪欲》の否定であるから、思想的に密接なつながりを持つことは、言うまでもない。したがって、上述のごとく両者の対応的一致は明白である。すなわち、(ト)の部分=18°である。

(チ)——しかし茲に一個の問題が存する。それは、イエス・キリストが核心的意義をもつ断章を有する《章》——17°《愛すべき宗教》があるからである。したがって、(ト)の叙述と17°とも関連が存することになり、(ト)・18°・17°の三者の関係如何が問題とならざるを得ない。この問題の解決は、18°と17°の順序決定に至大の影響を有つから、われわれは暫くこの問題を検討することにし度い。

(a) まず17°と18°が緊密な関連をもつことは、そのタイトルからして容易に察知しうることである。《宗教の基礎》Fondements de la religion (18°)とは、言うまでもなくキリスト教すなわち《愛すべき宗教》の《基礎》(《Fondements》 de 《la religion aimable》)ということである。しかし18°は《宗教の基礎と反論への回答》であって、《宗教の基礎》はその一部(前半)にすぎない。それゆえ17°の内容も本質的には18°の一部と推定しうる。

(b) しかし17°および(ト)は、《イエス・キリスト》を中心としていることそれ自身によって、18°の一部たる《宗教の基礎》のさらに一部たることが、推察されるのである。というのも、Non classéのLa. 470-Br. 805は《二つの基礎、一は内的、他は外的。恩恵、奇跡。どちらも超自然的。》と述べてい

るからである。この断章中の《二つの基礎》 les deux fondements とは、言うまでもなく《宗教》(キリスト教)の二つの基礎を意味している。そうしてこの基礎のうち、《内的》なるものの方 l'un intérieur が《恩恵》 la grâce であり、《外的》なるものの方 l'autre extérieur が《奇跡》 les miracles であることは、文意から推して明白である。さて《イエス・キリスト》は神の《恩恵》の最大の徴しであるから、《内的》なる基礎を構成している。しかし《宗教の基礎》全体から見れば、それはあくまで一部にすぎない。かように 17° の内容は実質上 18° の一部にすぎないから、17° は——断章 La. 309 (11°) にあっては——(ト)の形ちで簡潔に表現されているものと解しえよう。

(c) したがって 17° の内容は、元来 18° の前半に内在していたのであり、この内在的要素が一応暫定的に独立的形式を採ったものが 17° 《愛さるべき宗教》であると、推測しうるのである。この推測は、果して正しいであろうか。われわれは直接 17° の全文を検討することにし度い。La. 423-Br. 774——《すべての人のためのイエス・キリスト、一民族のためのモーセ。アブラハムにおいて祝福されたユダヤ人、「あなたを祝福するものを私は祝福する」しかし「あなたの子孫によってもろもろの国民は祝福を受けるであろう」〈軽いことである、云々〉〈異邦人を照らす光〉〈主はいずれの国民をもこのようにあしらわれたのではない〉と、ダビテは律法のことを語って言った。しかし、イエス・キリストのことを語れば、こう言わなければならない、〈主はいずれの国民をもこのようにあしらわれた〉〈軽いことである〉『イザヤ書』。したがって、普遍的なのは、イエス・キリストのおかげである。教会すら信者のために供え物をささげるにすぎない。イエス・キリストは、すべての人のために十字架の供え物をささげられた。》：La. 424-Br. 747——《肉的なユダヤ人と異教徒とは悲惨を持ち、キリスト者もそれを持っている。異教徒には、贖い主は存在しない。彼らはそんなものは望みもしないからだ。ユダヤ人にも、贖い主は存在しない。彼らはむなしくそれを望んでいる。贖い主はキリスト者のためにのみ存在する。(「永続性」を見よ)》。以上が 17° の章のすべてである、この主旨は《すべての人のための十字架の供え物》 le sacrifice de la croix pour tous (La. 423), 《贖い主》 Rédempteur (La. 424), 《すべての人のためのイエス・キリスト》

Jésus-Christ pour tous (La. 423) と表現こそ異なるが、要するに最後の語の意味するところに尽きる。それ以外は、附帶的叙述——聖書からの引用文か、主旨に関連する〈肉的ユダヤ人〉、〈異教徒〉、〈キリスト者〉の差異を述べたものにすぎない。この主旨そのものを注視するとき、キリスト教徒にとって、これが如何に自明の命題であるか、これに気附くことはわれわれにとって至極容易である。

一般に思想的に重要であるということと、叙述の手順の上で優先すべき重要性をもつということとは、別の事柄である。思想上重要事項であっても、何時でも容易に筆を下しうる事柄は、書き留める機会を失したならば取り返えしのつかない表現や思想⁽⁷⁾に比して、叙述の手順上後廻わしになることは、必定である。そうして 17° が、この後廻わしの部類に入ることも、その内容上明らかである。このことを示すものは、17° 全体の叙述の量である。叙上引用文が、17° の全文である。これは、15° bis および 25° に次いで、『パンセ』のリヤス中量的に最も少いものである。この量の少さならびに叙述のメモ的な簡単さ⁽⁸⁾こそは、この章中の思想の展開、充実を後日に期しているところの証左であって、じつにわれわれの推測を裏書きするものに外ならないのである。こうしてわれわれは、11° の (ト) が 18° より暫定的に分離独立して一章 (17°) を形成した事実を理解しうるのであるが、次にわれわれは、17° と 18° のプランにおける配置上の前後関係を、推測することに努めたい。

(d) 17° は前述のごとく、18° の前半と内的連関を持つものであり、したがってこれが独立の一章となった場合、18° の章の前後いずれに置かれたかが問題とならねばならない。この際注目すべき事柄は、17° は 18° の前半すなわち〈宗教の基礎〉に通ずるものであるということである。したがってもし 17° が 18° 全体の後に置かれたならば、18° の後半を構成する〈反論への回答〉と、これに接続すべき〈宗教の証拠〉(後述)との自然的な連続を中断することになり、また 17° 自身 18° の前半とのつながりを断つことになる。この二重の不自然を犯すまいとするなら、17° は当然 18° の前に置かれなくてはならない。したがって 17°→18° となるべきである。

〈註〉

- (5) P. Ernst, *la trajectoire pascalienne de l'Apologie*, Paris, 1967, p. 11. なお拙論 (II) を参照のこと。
- (6) *ibid.*, p. 58.
- (7) これにかんしては、パスカルの甥 Etienne Périer はポール・ロワイヤル版序文中で、〈なにか新しい思想や見方や観念あるいはなにか絶妙な言い廻しや表現〉を〈忘れないために〉pour ne les pas oublier 書きとめたことを、述べている (Pascal, *OEuvres complètes*, Éd. du Seuil, Paris, 1963, p. 497)。またパスカル自身「パンセ」の中で、次のごとく書いている——〈私の考えを書きとめている途中で、それがときたま逃げてしまうことがある。だがこのことは、つい忘れがちな、私の弱さというものを思いおこさせて呉れる。〉 (La. 146—Br. 372)
- (8) この章 (17°) の叙述全体 (La. 423—Br. 774, La. 424—Br. 747) を、例えば有名な断章 La. 343—Br. 233 の長文と比較せよ。後者の思想の展開の十全性、内容の充実、表現の洗練、要するに量と完成度において、遥かに前者を凌ぐものがあること、したがって前者の未完成の程を、容易にわれわれは理解しうるであろう。(IX の註了)

補註——註の番号は、前回と通し番号になっている。